

「にしか過ぎない」考

茂木 俊伸

キーワード：「しか」、「に過ぎない」、文末複合表現、電子化資料、例外／逸脱的現象

0. はじめに

『日本国語大辞典』第11巻の「過ぎる」(「すぎ=ない[=ぬ]」)の項(p.376)には、次の(1)のような例が見られる¹。また、国立国語研究所(1977)の比喩表現の調査・分類でも、比喩指標「にすぎない」の実現形の一つとして(2)のような例が挙げられている(p.272)。

- (1) 唯重苦しい気持ちの物思ひを裸になって熱い水のなかでつづけるためにそこへ行く
といふだけの事ににしか過ぎなかった [佐藤春夫「都会の憂鬱」]
- (2) どんな他人も、あなたにとっては、いずれ自分を映す鏡ににしかすぎないのですから。
[安部公房「他人の顔」]

本稿では、言語資料にしばしば現れるこの「にしか過ぎない」²という表現を扱う。

この表現は、分析的に見れば、「に過ぎない」と「でしかない／にしかならない／しかない」等の「～しか(…ない)」とが複合したものであると考えられる。しかし、このうち「に過ぎない」が慣用的なまとまりを成し、一方で「しか」が否定辞を要求する否定対極表現であることから、全体で顕在的な否定辞が一つしか存在しない「にしか過ぎない」という表現は、文法的に例外的な現象として扱われるべきであると考えられる。実際、多くの話者がこの表現に対して、許容できないもしくは過度に冗長であるという直感を持つ。

とはいえ、この「にしか過ぎない」は、時代を通じてさまざまな言語資料に現れる。したがって、文法体系の記述という観点からは、この表現を即座に例外として排除する前に、その使用の実態を把握する一方で、類似の表現の可能性、言い換えればこの種の表現の生産性や、この表現が成り立ちうる文法的な背景といった点の検討を通して、この表現の体系性の度合(裏を返せば「例外性」の度合)を確認しておく必要があると思われる。

以下、本稿では、まず「にしか過ぎない」の使用実態を電子化されたテキストデータ(電子化資料)における実例の把握という形で概観し、この表現に関する諸特徴を確認してお

¹ 以下、例文の引用に当たり、適宜表記の修正や下線の付加等を行う。また、基本的に例文右に出典を簡略化して添え、出典に関する詳細は論文末に挙げる。なお、例文右の出典が()表記のものは筆者が調査した実例、[]表記のものは文献等において言及されている実例である。

² 以下の記述では、「にしか過ぎない」「にしかすぎない」(文末の否定形式として「ない」「ません」「ぬ」「まい」が含まれる)及びこれらの活用形を含め、「にしか過ぎない」で代表させる。

く(第1節)。加えて、この表現に関する先行研究の記述を確認する(第2節)。続いて、「しか」と「に過ぎない」という構成部分それぞれの特徴から、「にしか過ぎない」の成立の背景にある要因について検討する(第3節)。最後に、電子化資料を用いた文法研究における本稿の位置付けと、本稿の分析が示唆する点を述べる(第4節)。

1. 用例の調査

本節では、「にしか過ぎない」の使用実態について、電子化資料を用いた事例の収集の結果を示す。資料のジャンルは、文学作品、新聞社説類、新聞以外の場で発表された評論・論説類の3種を選択し、「にしか過」及び「にしかすぎ」をキーワードとして検索を行った。

まず、文学作品(『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』)では、18例が確認された³。

以下に全例を挙げるが、1例を除き「にしか過ぎない」が名詞(句)に後接するものである。

- (3) 私自身にとってもその直感は参考にしか過ぎないのです。 (『Kの昇天』)
- (4) 思想は書棚を埋める壁土にしか過ぎなかった。 (『冬の日』)
- (5) そしてその不思議な日射しはだんだんすべてのものが仮象にしか過ぎないということや、仮象であるゆえ精神的な美しさに染められているのだということを露骨にして来るのだった。 (『冬の日』)
- (6) 過去の事は、苛められる筈にしかすぎない。 (『放浪記』)
- (7) 佐分利信子に一度憑かれたことのある鮎太の眼には、清香は、単に氣立ての優しい、虔しい、平凡な女性にしか過ぎなかった。 (『あすなる物語』)
- (8) 時にはその片雲が加藤の頬をぬらしたけれど、それはたんに、山の静けさを形成する一つのアクセントにしか過ぎなかった。 (『孤高の人』)
- (9) 孤独の中にわざわざ自分を閉じこめて、苦しみ抜いて、それがただあなた一人の問題にしかすぎないなんて、そんな寂しいことがあるでしょうか。 (『草の花』)
- (10) 若狭の国主一色左京大夫の姫も、いまは賭けの物件にしかすぎなくなっていた。 (『国盗り物語』)
- (11) これを機に信長の運はくだり坂になり、やがては衰滅ということになれば、この信長の装飾品にしかすぎぬ足利將軍は名実ともに征夷大將軍になり、ながい念願であった室町幕府をひらくことができる。 (『国盗り物語』)
- (12) だが、女のうしろには、沢山の眼がひかえている……女は、それらの視線の糸であやつられる、あやつり人形にしかすぎないのだ…… (略) (『砂の女』)
- (13) 思考も、判断も、渴きの前では、熱にほてった額に降った雪の一とひらにしかすぎなかった。 (『砂の女』)

³ 作家によっては複数の使用例が見られることから、この表現の使用に関する個人差も考えられるが、出身地や生年等のデータに関して顕著な偏りは見られなかった。

- (14) おれの脱出によって、女が失うものとは言えば、たかだかラジオと鏡でおきかえられる、生活の破片にしかすぎないはずだ。(『砂の女』)
- (15) あの印象があまりに永く醜態したために、目の乳房は、肉そのものであり、一個の物質にしかすぎなくなった。(『金閣寺』)
- (16) しかし、修一郎のこの思いは、ささやかな自己格闘にしかすぎなかった。(『冬の旅』)
- (17) しかし、あれは、俺が安を裏切ったということではない、安と関係のない場所で育ててきた思いにしかすぎない、(略) (『冬の旅』)
- (18) 己れの成したすべての行為と、そればかりではなく、行動にあらわさぬまでも、心に抱いただけにしか過ぎない恨みや怒りや慈しみや愚かさなどの結晶が、命そのものにくっきりと刻み込まれ、決して消えることのない烙印と化して、死の世界に移行した私を打擲していたのではあるまいか。(『錦織』)
- (19) 過去なんて、もうどうしようもない、過ぎ去った事柄にしか過ぎません。(『錦織』)
- (20) あなたにとって私は単なる職場のアルバイト生にしか過ぎぬことを知っている。(『二十歳の原点』)

このような名詞(句)に後接する「にしか過ぎない」は、「AはXにしか過ぎない」という文型において、「AはXに過ぎない」と同様、「Aは、何らかの尺度において(下位を占めると捉えられる)X以上の(厳密には、Xより大きな)値を持たない」という解釈を受ける。多くの場合、ここでの「尺度」「値」は、話者にとっての「意味」や「価値」に関係するものであると考えられ、ここから「に(しか)過ぎない」はある種話者の主観的な判断を示す表現と捉えることもできる (cf.田中(1995))。

上例のうち(18)のみが「文+だけ+にしか過ぎない」という承接関係にあるが、意味的には(「だけ」の扱いは保留するとして)名詞(句)の場合と同様の解釈になる。ここでは、「にしか過ぎない」と「だけ」及び文との承接という現象のみ指摘しておく。

次に、新聞社説類であるが、年代が異なる2種類の資料で調査した。うち、毎日新聞朝刊の社説2年分(1999~2001年)では、7例が確認された。

- (21) 容疑は、所得税法違反だが、脱税は疑惑の一部にしか過ぎない。(1999.11.30)
- (22) しかも土地税制というものは、地価が上昇した時を含めて土地保有税そのものにさかのぼって議論しないと、しょせんはその場限りの方策にしか過ぎなくなる。(1999.12.17)
- (23) 警察庁は悲しいかな警察も過ちを、しばしば犯す組織であると確認してほしい。(中略) その認識のない「改革」は、これまでと同じ「対症療法」にしかすぎない。(1999.12.30)
- (24) 阪神大震災で被害を受けた外国人たちの行動には、「想定」とつながるものは皆無だ。

- 思い込みに基づくものにしか過ぎない。(2000.04.12)
- (25) 全力を挙げて避難住民への支援を約束した政府と東京都は、越えなければならない「山」が、いくつも待っていることを忘れないでほしい。事故なしの島外避難は、その最初の「山」にしか過ぎない。(2000.09.02)
- (26) 会員である国公立と民間の病院 2557 施設のうち、回答したのは 4 分の 1 にしか過ぎない。(2001.01.31)
- (27) だが、国税局が究明できるのは元室長にかかわる税務上の疑惑と周辺のカネだけだ。厚いバールに包まれた合わせて約 72 億円にも及ぶ両機密費の流れの一部にしか過ぎない。(2001.02.10)

また、朝日新聞天声人語・社説 7 年分 (1985~1991 年) でも 7 例が確認された。

- (28) それは 1 つの解決策ではあっても、官公部門のスト一律禁止の是非への答えにはなっていない。問題の先送りにしかすぎまい。(1985.12.01 [社])
- (29) 国債の償還には、一部にしかすぎぬとはいえ、税金など一般財源をあてることも続けるべきである。(1986.04.04 [社])
- (30) 平均すると稲作所得は農家所得の 6%弱にしか過ぎず、米価に課せられた「農家の賃金」としての意味はすでにかなり薄れている。(1986.07.31 [社])
- (31) この青年にとっては、8・15 も 12・8 も、同じように過去の歴史上のできごとにしかすぎない。(1986.12.08 [社])
- (32) たとえ 4 島が一気に明日から還ってきたとしても、それは親交の始まりにしかすぎない。(1991.04.18 [天])
- (33) ソ連側としても、外からの支援は国内改革の触媒にしかすぎないことを知ってほしい。(1991.04.19 [社])
- (34) 人事院の調べでも、大企業は事業所で 6 割近く、労働者で 7 割ほどが完全週休 2 日になっている。が、従業員 500 人未満の中小では、事業所の 4 分の 1 強、労働者の 3 割弱にしかすぎない。(1991.08.08 [社])

ここでは、「にしか過ぎない」が通常の名詞(句)に加え、数量表現、特に割合を表す表現 ((26)(30)(34)) や「(～) 一部」のような部分量を表す表現 ((21)(27)(29)) に後接する例が観察される。これは、先に示した「A は X にしか過ぎない」の X が、文字通りの「値」を持つ例であると捉えられる。

最後に、評論・論説類 (『これからどうなる 21-予測・主張・夢- CD-ROM 版]) における調査では、3 例が確認された。ここでも、通常の名詞(句)と比率・部分を表す数量表現への承接例が観察された。

- (35) 米英合わすと実に 65%に近く、彼らがしばしば増大の一途を辿るとして非難するロシアや中国の場合は、それぞれたかだか 8.6%と 1.5%にしかすぎません。(國弘)
- (36) そうでなければ、一部のテレビ視聴者やインターネット交信のように、一時の個人的うさ晴らし、悪罵のはげ口としての存在としてしか扱われず、それは流砂のような存在にしか過ぎない。(筑紫)
- (37) 解決を求め、解決が得られたとしても、それは所詮中途にしか過ぎない。(末木)

以上計 35 例は、事例の総数としては少ないものの、ジャンルも年代も異なる資料に現れたものである。したがって、この「にしか過ぎない」の出現は、ある時代のある特定の個人に現れた偶発的な誤りである、あるいは、文学作品特有の修辭的な表現である、とするだけでは捉えきれない現象であると思われる。

なお、さらに時代を遡ると、明治から昭和初期の資料にもいくつかの例が見られる⁵。今回の調査で確認された最も古い例は、山田美妙(1868-1910)の『太郎定綱』(1911年(没後)発表)中の例(38)である(J-TEXTによる)。また、昭和初期の作品では(39)-(42)のような例が確認された(いずれも青空文庫による)。

- (38) 言はうとする名乗り口上だけは此頃の武士の常からの習練とて如何にも如何にも淀み無く厳かに述べ立てる服装は勿論腹巻き姿位にしか過ぎぬ。(『太郎定綱』)
- (39) 未来の可能性は、それがどんなに現在の凡人に無稽(むけい)に見えても実は現在の可能性のほんのわずかの延長にしか過ぎないからである。(『科学について』)
- (40) だが諸君にして、もしそれを仮想し得ないとするならば、私の現実に経験した次の事実も、所詮(しょせん)はモルヒネ中毒に中枢を冒された一詩人の、取りとめもないデカダンスの幻覚にしか過ぎないだろう。(『猫町』)
- (41) 古い由緒も、非常識な夫の手にかかっては、解剖のあとの屑骨(くずほね)などを抛(な)げこんで置く地中の屑箱にしか過ぎなかった。(『俘囚』)
- (42) 現在眼の前の海なんてものはそれに比べたらラフな素材にしか過ぎない。(『海』)

⁴ ただし、調査対象となる資料の規模や種類を広げることで、より多くの例が確認される。

例えば、新聞記事の言語表現には一般的に編集者の手が加わっていると考えられ (cf. 後藤(1996))、冗長な表現の出現はそれほど期待できないと思われるが、新聞各版や週刊誌のデータを含む朝日新聞記事データベース(DNA) (<http://www.asahi.com/>) における検索(対象期間は 1984 年～2000 年に設定)では、確例として 367 例が得られた。

また、インターネット上には、必ずしも従うべき規範を持たない、多様な文体の文書が混在している (cf. 田野村(2000c)) が、ロボット型検索エンジン kensaku.org (<http://www.kensaku.org/>) を用いて 2001 年 3 月 26 日に実施した調査では、厳密な用例数とは言えないものの、約 18,000 ヒットという結果が得られた。

⁵ 「にしか過ぎない」の出現時期は不明であるが、山口(1991)によれば、「しか」の用例の出現は江戸時代後期からとされる。

2. 先行研究における「にしか過ぎない」

前節で見たように、「にしか過ぎない」の出現自体は時代を遡って確認できるが、これまでの文法研究ではこの表現に対する言及はほとんどなされていない。管見の限りで確認できた先行研究は、Martin(1975)と森田・松木(1989)のみである。

Martin(1975)は、「[名詞(N)]にしか過ぎない」「[名詞]だけに過ぎない」「[名詞]だけにしか過ぎない」について、その強調の度合で若干の差はあるものの、いずれも“it is nothing more than just N”の意を表すとし(p.77)、次の(43)のような週刊誌からの実例を挙げている(p.907)(原文はローマ字表記)。

- (43) a. 実はロボットにしか過ぎない。〔週刊朝日〕2635号, p.21
b. 西洋人の外交上の美辞麗句は卑俗な食欲を覆い隠す、単なるペールにしか過ぎないのではないか。〔中央公論〕985号, p.295

さらに、「[動詞タノル形(V-ta/-ru)]にしか過ぎない」の例として(44)を挙げる一方で、「[形容詞イノカタ形(A-i/-katta)]にしか過ぎない」という文型は困難であるとしている。

- (44) 具体的なことは述べず、ただ一般的なことを説明した／するにしか過ぎない。

同様に、森田・松木(1989)でも「に過ぎない」の項において「にしか過ぎない」の実例が挙げられているが、「間に助詞等が挿入される例は稀である」(p.286)とされる。

- (45) 社宅を好まぬのは、いわば彼の趣味の問題にしか過ぎなかった。
〔柴田翔「立ち盡す明日」〕

Martin(1975)や森田・松木(1989)は、おそらく実例調査で確認された用例に基づく記述を行っており、その性格上、この表現を積極的に逸脱的もしくは誤用とは明言していないのだと思われるが、先に触れたように、「にしか過ぎない」は、「しか」と「に過ぎない」の特徴を考え合わせると、文法的（より厳密には統語論的）には例外的な表現であると言わざるをえない。ところがその一方で、意味的側面を見た場合、この表現に大きな矛盾は存在しないことが分かる。次節では、このような、「にしか過ぎない」の構成要素の特徴から見たこの表現の意味・統語両面の特徴について検討していく。

3. 構成要素から見た「にしか過ぎない」

本節では、「にしか過ぎない」の特徴について、「しか(…ない)」「に過ぎない」という二つの構成要素それぞれの分析から検討を加える。

3.1 「にしか過ぎない」の2つの成立条件

まず、次のような例をとりたてて詞「しか」を中心に考えてみる。

- (46) a. (あくまでも) 太郎は臨時雇いの社員にしか過ぎない。
b. 回答を寄せた機関は、全体の4分の1にしか過ぎなかった。

「しか」は、必ず否定辞と共に起る否定対極表現であり、「しか…ない」で一つの意味を担う。例えば、「しか…ない」と「だけ」は同義性を保ちながら交替可能である。

- (47) a. 今、この部屋には太郎だけがいる。
b. 今、この部屋には太郎しかいない。

このことを確認した上で、(46)から「しか…ない」を除いてみる。

- (48) a. *太郎は臨時雇いの社員に過ぎる。
b. ??回答を寄せた機関は、全体の4分の1に過ぎる。

このとき、「に過ぎる」という表現自体が奇妙であり、解釈するとすれば「以上である」という意味になるが、これは(46)の表す意味とは異なる。このことは、「に過ぎない」全体で一つの表現として固定化・慣用化していることを示している (cf.井口(1986:94),村木(1991:113),田中(1995:212))。そして、この慣用化に伴い、「に過ぎない」の否定辞「ない」は、通常の否定辞と異なる性質を持つ、より具体的には、否定辞の持つ特徴が何らかの形で欠如することになる。例えば、(49)のように、動詞の項位置の「しか」は「に過ぎない」と共起できない。

- (49) a. 僕はこの場を用意したに過ぎない。
b. *僕はこの場しか用意したに過ぎない。

同様に、例えば、先行研究 (村木(1991:113),田中(1995:212),早津(2001:229)) が「に過ぎない」と同様の複合表現として挙げている「に忍びない」も「しか」と共起できない。

- (50) a. この机は捨てるに忍びない。
b. *この机しか捨てるに忍びない。
c. *この机は捨てるにしか忍びない。

この(49b)及び(50b-c)から、これらの表現における否定辞は「しか」との共起を統語的に許

すものではないことが分かる⁶。このような共起が見られる例は、実例調査でも、「にしか過ぎない」という表現を除き、皆無であった⁷。

一方、「にしか過ぎない」のうち「に過ぎない」を中心に考えてこの部分を固定した場合、否定対極表現「しか」の生起にはさらに「ない」が要請される。しかし、否定辞が新たに加わった「にしか過ぎなくない」のような表現が形成されることはない。

以上のことから、「にしか過ぎない」が「に過ぎない+しか(…ない)」という単純な足し算では捉えられず、「ない」に関わる二つの表現がいわば二重に一つの「ない」に関係していること、そしてこの関係の成立は、(46)と(49)の対照性が示すように「に」と「過ぎない」の間という「しか」の位置が問題となること(＜位置の条件＞とする)が指摘できる。

しかしながら、「しか」以外のとりたて詞、例えば「は」や「も」の場合は、「に過ぎない」中の同様の位置にこれらが現れる表現は成立しない⁸。

(51) a. *合格者は、30人には過ぎない。

b. *合格者は、30人にも過ぎない。

これは、対応する肯定形を持たない同様の複合表現「に満たない」に「も」が現れる一方で「しか」が現れないことと対照的である。実例調査でも(53)のような例はなかった。

(52) 出席者は、30人にも満たなかつた。

(53) *出席者は、30人にしか満たなかつた。

このように、「に過ぎない」への「しか」、「に満たない」への「も」の出現が見られる一方で、その逆の組み合わせは成立しないことから、「に～ない」という形態の慣用表現ととりたて詞との複合のパターンが問題となることが分かる(＜組み合わせの条件＞とする)。

⁶ 文末複合表現における否定辞に関する同様の現象は、陳述副詞や「誰も」「何も」等の「疑問詞+も」等、他の否定対極表現の場合にも起こる。陳述副詞における問題については工藤(2000)を参照。

⁷ 資料中に唯一次のような例があったが、意味的に「しか」が「過ぎない」の否定辞と関係を持つかどうかの判断が明確にできないため、扱いを保留した。

(i) 月の光が一番いい。何故ということは云わないが、——という訳は、自分は自分の経験でそう信じるようになったので、或は私自身にしかそうであるのに過ぎないかも知れない。(『Kの昇天』)

⁸ ただし、資料中には次のような例があった。

(i) 部下の心を得てこれに死力を尽さしむること、古の名將といえどもこれには過ぎまい。(『李陵』)

丸山・岩崎(1968)は、「にすぎない」相当の古典語の用例として、「人間の大事此の三つには過ぎず」(徒然草：123段)という例を挙げている(p.39)が、上例(i)も、作品の題材・文体から考えてこれと同様の用例として位置付けられると思われる。ただし、これらの「AはXに(は)過ぎず」は、「AとしてX以上のものはない」という、本文中で扱う「AはXに(しか)過ぎない」とは異なる解釈を受ける。

この点については、動詞「過ぎる(過ぐ)」の意味変化に伴い、「に過ぎない」全体の意味や「に」の後への要素の出現の可否が異なるという可能性があるが、この問題の検討には通時的な視点からの研究を要すると思われ、本稿の考察の範囲を超えるため、ここではこれ以上触れない。

3.2 「に過ぎない」と「しか…ない」

以下、この〈組み合わせの条件〉の背景を探るために、「にしか過ぎない」を構成する「に過ぎない」「しか(…ない)」それぞれの意味について考えてみる。

3.2.1 意味的な共通性

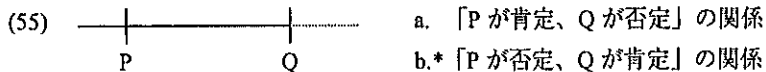
先行研究や辞典類における「Xに過ぎない」の記述は、これが「Xであり、それ以上ではない」という意味を持つという点で概ね一致する。

- (54) a. 政治家も、引退すれば一市民に過ぎない。
b. このアルバイトは、お金のために我慢してやっているに過ぎない。

Xには名詞(句)((54a))や文((54b))といった範疇が該当するが、いずれの場合も、何らかの尺度・序列にXが位置付けられ、その目盛りを基準としてそれより大きな値Yが否定される。

一方、「XしかPない」は、要素XについてPの成立が肯定され、X以外の要素Yについてこれが否定される「其他否定」(山口(1991))を表すが、このXが何らかの尺度表現として解釈される場合、Xと対立項Yとの間には一定の関係が成立する。

加賀(1997)によれば、尺度表現に関して、尺度上の二項が対立的な(肯定/否定の)関係にある場合、次の図に示すような、尺度上の下位項((55)の「P」)を肯定し、かつ上位項(同じく「Q」)を否定する関係のみが許されるとされる(pp.134-135)。



この一般化から、「XしかPない」において肯定されるXと否定されるYとの関係は、尺度上において必ず $Y > X$ (YがXより上位)になると言える(cf.茂木(2001))。

以上のことから明らかなように、「に過ぎない」「しか…ない」は、「尺度表現Xについて肯定し、対立項Yについて否定する(ただし $Y > X$)」という内容を表すという点で一致する。

これらの意味的な共通性は、その共起成分からも窺える。例えば、先に第1節に示した例に見られる「単に(単なる)」((7)(8)(20))、「たかだか」((14)(35))、「しょせん(は)」((22)(37))等との共起は、「に過ぎない」と「しか…ない」(「でしかない」「にしかならない」)のいずれにも見られるものである。

3.2.2 組み合わせの条件

次に、3.1節で指摘した「しか」「に過ぎない」の組み合わせの問題の検討に移る。

まず、「にも過ぎない」「には過ぎない」がなぜありえないのかを考える。

そもそも、次の(56)のような「尺度表現 X |は/も| …否定辞」という文型では、尺度上の ($Y > X$ の関係における Y を含む) X 以上について否定される⁹。すなわち、(56)で肯定される実数量は、言語形式として現れる X (「30 人」) に満たない (cf.井島(1995))。

- (56) a. 合格者は、30 人はいない。(28 人だった。)
b. 合格者は、30 人もいない。(20 人前後だった。)

(56b)の「も」の例では、沼田(1986)や井島(1995)等が指摘するように、(57)のような二つの解釈が可能であるが、いずれにしても X (「30 人」) は否定される数量となる。

- (57) a. 30 人も (=そんなに多くの人数は) 合格しなかった。
b. (たったの) 30 人も合格しなかった。

一方、「X に過ぎない」は、3.2.1 節で示したように、X を肯定かつ Y を否定する (ただし、 $Y > X$)。

- (58) 合格者は、30 人に過ぎない。(それより多くはいない。)

以上の「X は…ない」「X も…ない」と「X に過ぎない」を比較すると、X についての肯否が異なることが分かる。したがって、3.2.1 節で指摘した「しか…ない」と「に過ぎない」の意味的な整合性から考えると、ここでの組み合わせが成立しない理由は、意味的な不整合、すなわちこの X に関する矛盾に求められる。

同様に、「に満たない」と「しか (…ない)」の組み合わせがありえないということも、基本的に両要素の意味的特徴から説明できる。

まず、「X に満たない」であるが、この表現では X が否定される。例えば、(59)における実数量は X (「30 人」) に達しない。

- (59) 合格者は、30 人に満たない。(20 人前後だった。)

一方、「X しか…ない」は、先に 3.2.1 節で述べたように X を肯定 (かつ Y を否定) するため、この組み合わせでも二つの表現の間に X に関する矛盾が起こることが確認される。

⁹ 「30 人はいない」「30 人もいない」という文自体からは、それぞれ「不在者数が少なくとも 30 人に上る」「不在者数が 30 人にも達する」といういわゆる述語否定解釈も得られるが、ここでは「は」「も」と慣用的な文末複合表現との組み合わせを考えるため、考慮しない。

(60) 合格者は、30人しかいない。(それより多くはいない。)

これに対し、「にも満たない」の場合、上に示したように、「に満たない」((59))と「も」((56b))との間にここで問題となるような不整合は存在しない。

以上のように、尺度表現に関してその位置付けに矛盾が生じる場合、対応する肯定形を持たない慣用的な「に…ない」表現とその内部に現れるとりたて詞の組み合わせによる複合表現は成立しない、と言える。

逆に考えれば、「にしか過ぎない」の成立には、「しか(…ない)」と「に過ぎない」との間にこのような意味的矛盾が存在せず、少なくとも意味的には「にしか過ぎない」の成立を妨げる要因がないという点が大きく関わっていると思われる。

このような現象に関して、「そもそも「に過ぎない」は慣用句であり、その中に要素が割り込むことはできないが、「しか」の出現は例外的に起こったものである」という記述で十分とする考え方もあろうが、このような観点では、「なぜ「に過ぎない」に「しか」が(そして、「に満たない」に「も」が)現れるのか」という問題を説明しえない。

確かに、上で示した<位置の条件>は、否定対極表現の一般的な分布パターン(注6参照)から見てこのような「しか」の出現が例外的なものであることを示している。しかしその一方で、<組み合わせの条件>からは、「に過ぎない」における「しか」の出現が一定の規則性に支えられていることが分かる。つまり、「にしか過ぎない」は、単なる「例外」ではなく、これを構成する両要素の意味が分析的に捉えられた上で成立している、逸脱性と規則性の二面性を持った表現であると考えられる。

4. 電子化資料における例外的・逸脱的用例の分析

これまで、個人の内省では捉えきれない現象が明らかになるという点で、文法研究において電子化資料を(補助的に)用いることの有益性が指摘されてきた(cf.近藤(2000),田野村(1995a,b)(2000a,b))。実際、本稿における「にしか過ぎない」に関する諸問題の分析も、電子化資料における事例の確認を発端としている。

しかし、内省では許容しにくい、もしくは非文法的と判断できる表現が資料にある程度の数出現「してしまう」という、言語能力(内省)と言語運用(実例)のズレが問題になるケースや、そのズレが著しい例であると考えられる、電子化資料に「散発的に出現する拡張的な用例や例外的な用例」(田野村(2000a:222))の扱いは課題とされてはいるものの、これらのケーススタディはこれまでほとんどなされていない¹⁰。本稿は、このようなケースを扱った一つの試みである。

本稿で示した「にしか過ぎない」の統語的な逸脱性と意味的な整合性という二面性は、逸脱的・例外的・拡張的と考えられる現象にも、一定の規則性、すなわちその現象の拡張

¹⁰ このようなケースとして位置付けられうる文法現象に關与的な特徴の分析を行っている最近の研究として、例えば、仁田(2000),野田(2000),又平(2001)等が挙げられる。

を裏付ける文法内部の基盤が、部分的なものであっても存在するというを示唆している。本稿では、このような現象が、出現の実態の確認のみに止まらず、文法記述の問題として検討できる性質のものでありうるということを確認したと言える。

またさらに、このようなズレが目される現象に関する言語事実の記録、可能な限りの共時的な観点からの分析は、より動的な視点からの文法研究に対する資料の提供という側面も持ちうると思われる。

【参考文献】

- 井口厚夫 (1986) 「動詞と否定」『国文学 解釈と鑑賞』51-1, pp.91-95, 至文堂.
- 井島正博 (1995) 「数量詞とハ・モ」築島裕博士古稀記念会(編)『築島裕博士古稀記念 国語学論集』pp.1041-1062, 汲古書院.
- 加賀信広 (1997) 「(第Ⅱ部) 数量詞と部分否定」廣瀬幸生・加賀信広『日英語比較選書 4 指示と照応と否定』pp.92-178, 研究社出版.
- 工藤真由美 (2000) 「(第2章) 否定の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』pp.95-150, 岩波書店.
- 国立国語研究所 (中村明) (1977) 『国立国語研究所報告 57 比喩表現の理論と分類』秀英出版.
- 後藤 斉 (1996) 「コーパスとしての新聞記事テキストデーター終助詞「かしら」をめぐってー」『東北大学言語学論集』5, pp.37-46, 東北大学言語学研究会.
- 小矢野哲夫 (1986) 「個人の言語直観はどこまで信頼できるか」『日本語・日本文化』13, pp.1-14, 大阪外国語大学留学生別科.
- 近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』ひつじ書房.
- 杉本 武 (2001) 「文法分野での計量的研究概観」『日本語学』20-5, pp.174-182, 明治書院.
- 田中 寛 (1995) 「モダリティに關与する動詞述語表現」窪田富男教授退官記念論文集編集世話人(編)『日本語の研究と教育 窪田富男教授退官記念論文集』pp.196-224, 専門教育出版.
- 田野村忠温 (1995a) 「日本語研究の限界」『日本語学』14-4, pp.80-88, 明治書院.
- 田野村忠温 (1995b) 「パソコン利用の現状と課題 意味」『日本語学』14-8, pp.53-62, 明治書院
- 田野村忠温 (2000a) 「意味分析と電子資料ー副詞「よほど」の分析を例にー」山田進・菊地康人・初山洋介(編)『日本語 意味と文法の風景ー国広哲弥教授古稀記念論文集ー』pp.211-224, ひつじ書房.
- 田野村忠温 (2000b) 「用例に基づく日本語研究ーコーパス言語学ー」『日本語学』19-5, pp.192-201, 明治書院.
- 田野村忠温 (2000c) 「電子メディアで用例を探すーインターネットの場合ー」『日本語学』19-6, pp.25-34, 明治書院.
- 仁田義雄 (1995) 「文法における規則性と例外的現象」『日本語学』14-4, pp.42-51, 明治書院.
- 仁田義雄 (2000) 「用例を利用するー文法研究の場合ー」『日本語学』19-6, pp.56-65, 明治書院.

- 沼田善子 (1986) 「(第2章) とりたて詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』pp.105-225, 凡人社.
- 野田春美 (2000) 「「ぜんぜん」と肯定形の共起」『計量国語学』22-5, pp.169-182, 計量国語学会.
- 早津恵美子 (2001) 「日本語における語彙的な意味の単位をめぐって」津曲敏郎(編)『環北太平洋の言語』7 (文部省科学研究費補助金特定領域研究(A)「環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究」成果報告書 A2-002), pp.219-254.
- 又平恵美子 (2001) 「「イチゴが売っている」という表現」『筑波日本語研究』6, pp.93-102, 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室.
- 丸山和雄・岩崎摂子 (1968) 「現代語文末表現における“ない”の諸相—その慣用表現の構造的類型—」『弘前学院短期大学紀要』4, pp.29-56.
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房.
- 茂木俊伸 (2001) 「とりたて詞「しか」における「予想」について」『筑波大学 東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究成果報告書 平成12年度 別冊 日本語のとりたて』pp.231-250, 筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究組織.
- 森田良行・松本正恵 (1989) 『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』アルク.
- 山口堯二 (1991) 「副助詞「しか」の源流—その他を否定する表現法の広がり—」日本語語源研究会(編)『語源探求 3』pp.34-48, 明治書院.
- Martin, Samuel E. (1975) *A Reference Grammar of Japanese*. Yale University Press.

【参考資料】

日本大辞典刊行会(編)(1974)『日本国語大辞典』第11巻, 小学館.

【例文出典】

・CD-ROM

- 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』新潮社/NEC インターチャネル, 1995年
例文右に作品名を挙げた。以下、「本文中の例文番号:『作品名』著者(生年・出身地)」の順。
- (3)-(5), 注7(i):『Kの昇天』『冬の日』梶井基次郎(1901(明34)・大阪)
- (6):『放浪記』林芙美子(1903(明36)・山口)
- (7):『あすなろ物語』井上靖(1907(明40)・北海道)
- (8):『孤高の人』新田次郎(1912(大1)・長野)
- (9):『草の花』福永武彦(1918(大7)・福岡)
- (10)-(11):『国盗り物語』司馬遼太郎(1923(大12)・大阪)
- (12)-(14):『砂の女』安部公房(1924(大13)・東京)
- (15):『金閣寺』三島由紀夫(1925(大14)・東京)
- (16)-(17):『冬の旅』立原正秋(1926(昭1)・朝鮮)
- (18)-(19):『錦織』宮本輝(1947(昭22)・兵庫)

(20)：『二十歳の原点』高野悦子（1949(昭24)・栃木）
注8(i)：『李陵』中島敦（1909(明42)・東京）

- 「これからどうなる 21-予測・主張・夢- CD-ROM版」岩波書店，2000年
例文右に著者姓を挙げた。以下、「例文番号：『項目タイトル』著者（生年）」の順。
 - (35)：『日米関係のこれから』國弘正雄（1930(昭5)）
 - (36)：『無党派層のこれから』筑紫哲也（1935(昭10)）
 - (37)：『「終りの始め」に何が見えるか?』末木文美士（1949(昭24)）
- 『EB 朝日新聞-天声人語・社説 増補改訂版(英訳付)』日外アソシエーツ，1992年
例文右に日付と出典（[天]は天声人語、[社]は社説）を挙げた。

・Web

- J-TEXT（2001年3月時点）：<http://www.j-text.com/>
例文右に作品名を挙げた。以下、「例文番号：『作品名』（発表年）著者（生年・出身地）」の順。
 - (38)：『太郎定綱』（1911(明44)）山田美妙（1868(明1)・東京）
- 青空文庫（2001年3月時点）：<http://www.aozora.gr.jp/>
例文右に登録作品名を挙げた。以下、「例文番号：『登録作品名』（『作品名』（発表年）著者（生年・出身地）」の順。
 - (39)：『寺田寅彦随筆集第二巻「科学について」』（『科学と文学』（1933(昭8)）
寺田寅彦（1878(明11)・東京）
 - (40)：『猫町』（1935(昭10)）萩原朔太郎（1886(明19)・群馬）
 - (41)：『俘囚』（1934(昭9)）海野十三（1897(明30)・徳島）
 - (42)：『海』（1930(昭5)：未定稿）梶井基次郎（1901(明34)・大阪）
- 毎日新聞社説（1999年4月～2001年3月分）：<http://www.mainichi.co.jp/>
例文右に日付を挙げた。

付記

本稿は、筑波大学大学院 文芸・言語研究科の開設科目「コンピュータ言語学研究(3)」における発表に基づくものである。有益なご指摘をいただいた科目担当の杉本武先生及び出席者の方々に御礼申し上げます。